

【旧約聖書日課】ゼカリヤ書 2章14～17節

14 娘シオンよ、声をあげて喜べ。

わたしは来て

あなたのただ中に住まう、と主は言われる。

15 その日、多くの国々は主に帰依して

わたしの民となり

わたしはあなたのただ中に住まう。

こうして、あなたは万軍の主がわたしを

あなたに遣わされたことを知るようになる。

16 主は聖なる地の領地として

ユダを譲り受け

エルサレムを再び選ばれる。

17 すべて肉なる者よ、主の御前に黙せ。

主はその聖なる住まいから立ち上がられる。」

【福音書日課】ルカによる福音書 1章57～66節

57さて、月が満ちて、エリサベトは男の子を産んだ。58近所の人々や親類は、主がエリサベトを大いに慈しまれたと聞いて喜び合った。59八日目に、その子に割礼を施すために来た人々は、父の名を取ってザカリアと名付けようとした。60ところが、母は、「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言った。61しかし人々は、「あなたの親類には、そういう名の付いた人はだれもない」と言い、62父親に、「この子に何と名を付けたいか」と手振りで尋ねた。63父親は字を書く板を出させて、「この子の名はヨハネ」と書いたので、人々は皆驚いた。64すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた。65近所の人々は皆恐れを感じた。そして、このことすべてが、ユダヤの山里中で話題になった。66聞いた人々は皆これを心に留め、「いったい、この子はどんな人になるのだろうか」と言った。この子には主の力が及んでいたのである。

その日、多くの国々は！

アドヴェントの四本目のロウソクに火が灯りました。真ん中の「降誕のロウソク」が灯されずに残っているように、教会暦ではまだ「降誕」の祝いのときを迎えていませんが、今日の主日、わたしたちは主のご降誕を祝う礼拝として共にここに集ってきました。朝からクリスマスの祝いの挨拶を互いに交わされたことと思います。

わたしも、皆さんとクリスマスの挨拶を交わしますが、実のところ少しばかり控えめにしています。24日夕「降誕前夜〔クリスマスイブ〕」の「聖夜礼拝」を前にして祝いの気分になってしまうと、準備が疎かになってしまいかねないからです。日曜日に祝う「降誕」の礼拝はもちろん大切ですが、「降誕前夜」の礼拝も大切です。正直に言えば、どちらかと言えば「降誕前夜」の礼拝のほうに力を入れているかもしれません。何となれば、教会の外の方々はどこかと言えば、日曜日の「降誕」礼拝よりも「降誕前夜」の「聖夜礼拝」のほうに関心を持っておいでくださるからです。わたしが歩んで来たどこの教会でも、「降誕前夜」の礼拝にこそ多くの教会員以外の方々がおいでくださっていました。

わたしたちは、主日に祝う「降誕」礼拝は、通常の主日礼拝と変わらぬ礼拝をいたします。どこの教会でもそうでしょう。一方で、「降誕前夜」の聖夜礼拝は、どこの教会も特別な形式で整えます。ロウソクを用いての「燭火」礼拝、多くの讃美や音楽を用いての「讃美」礼拝、「音楽」礼拝など、特別な呼び方をする場合もあります。どのようなところに特別に重点を置いているか、教会ごとの特徴が現れるのです。石神井教会の場合は、「降誕物語とキャロルのささげもの」と副題を付けた形式で「降誕前夜」の聖夜礼拝を整えるようになって、今年で四年目になります。「主の降誕」を物語る聖書の朗読を聞き、「降誕」の讃美歌を次々に歌っていく形式です。このような形式の「降誕」礼拝は、古い伝統があるようですが、百年ほど前に英国で整えられた形式が広く知られるようになったものです。ひたすら聖書朗読を聞き、讃美を歌う形式ですから、特別な趣向は無いのですが、素朴に「降誕」の物語を味わい祝うことができる礼拝となっています。子どもたちと祝う「降誕劇礼拝」のように視覚に訴えることはしませんが、いわば一人ひとりの想像力に訴えるのです。

そのような礼拝を整えてきたのは、何よりも、一人でも多くの方、キリスト教会や聖書のことを良く知らない方にも、共に「主の降誕」を祝っていただきたいと願ってのことです。長い信仰生活を送って来られた方には当たり前の「主の降誕」の物語かもしれませんが、たとえ知らない方であっても、そこにおいでくだされば、少しはお分かりいただけるでしょう。ですから、教会の皆さんには、お誘いいただきたいのです。ご自分は来られなくても、「主の降誕」を知らずにいるご家族や知人に、ご案内いただきたいのです。そのようにして、かつて預言者が告げた通りの「その日」を迎えることへと、希望を向けていただきたいのです。預言者ゼカリヤは、主の言葉をこう告げました。

「その日、多くの国々は主に帰依して…」。

「あなたのただ中に住まう」

この週、世界中で「クリスマス」が祝われるでしょう。宗教の異なるはずの人々も含めて「クリスマス」は祝われます。それは、今や、宗教に無節操だと言われる日本だけのことではありません。よほど厳しい戒律を要求する宗教の下にある地域や、わたしのようなへそ曲がりでない限り、あらゆる国々で、「クリスマス」が祝われるのです。口の悪い人は、そのような現象を「商業主義」とか「世俗主義」という言葉で批判するかもしれませんが。確かに以前は、教会が配る案内に「本当のクリスマスは教会で」といった言葉が添えられることが多くありました。「世間の人々はクリスマスの本当の意味を知らないから、教会に来てそれを知ってほしい」、との願いがありました。

もちろん、わたしたちは、「クリスマス」の本当に大切な意味を多くの人に知ってもらいたいと思います。「クリスマス」を、単にロマンチックな一日と考えていたり、特別な食事をしてプレゼントをもらう日としか思っていないならば、もったいないと思います。難しいことを期待しているわけではありません。ただ、あの「主の降誕」の物語を聞いて、心に留めていただきたいのです。

とは言え、わたしたちは、そのことを願う前に、神がすでに始めてくださっていることに、もっと目を向け、心に留めるべきなのかもしれません。すでに神が、この世界の隅々にまで「主の降誕」のしるしとして「クリスマス」の言葉をもらしてくださっているということに、です。

11月に来日されたカトリック教会のローマ教皇がしばしば語られることとして知られることですが、これまでの教会は扉の中で人々のことを待っているばかりであったが、教会は、この世の人々の中に出て行って、そこで傷ついている人々のための「野戦病院」としての本来の役割を取り戻すべきだ、というのはその通りでしょう。わたしたちの教団では、教会が積極的に社会に出て行って責任を担うべきかどうかということでも長年、意見が割れてきましたが、まったく社会と関わらずに「閉ざされた活動」に徹すべきだと考える者はいないでしょう。少なくとも、わたしたち一人ひとり、主の日毎に教会の礼拝からこの世へと遣わされて行って、それぞれの役割を果たすのだという考えは、共有されてきました。

今日、わたしたちが心に留めたいのは、そのことではありません。わたしたちがそうすべきだという前に、すでに神が始めてくださっていることがある。わたしたち「神を信じている」と自称している者たちがノロノロしているあいだに、神ご自身が先んじてこの世界のただ中に入り込まれて、そこで為してくださっていることがある。そのことに心を留めたいのです。

世界中に「クリスマス」が溢れています。それは、人の営みとして広められてきたように見えて、実は、神が為されていることがあってのことではないでしょうか。神がすでに、この世界の隅々にまで住まわれるようにして、おいでくださっているからのことなのではないでしょうか。そこで起こっている事々の中に、神の為してくださっている小さな出来事が、隠れているのではないのでしょうか。「主の降誕」とは、そもそも、そのようなことだったのではないのでしょうか。

心に留める

「主の降誕」の物語が語られる中で、もう一つの家族の物語が語り継がれてきました。ルカ福音書が伝える、ザカリアとエリサベトという老夫婦、そしてその夫年寄り子のヨハネと名づけられた幼子、その家族の物語です。

ザカリアは、イスラエルの祭司の身分の人でした。妻エリサベトも、あのモーセの時代から祭司の役割を担ってきたとされるアロン家の出身の人でした。「二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった」(ルカ 1:6) と紹介されています。ただ、二人にはなかなか子が与えられなかったのです。その二人に子が与えられたことは、きっと本人たちだけでなく周りの人たちにとっても、驚きであり、喜びであったでしょう。

ところが、周りの人たちには、一つの危惧がありました。エリサベトが身ごもったのと相前後して、ザカリアは口が利けなくなっていたのです。それは、祭司の務めで神殿に入った日のことでした。香をたいて祈りをささげたら、間もなくザカリアは出て来るはずでしたが、なかなか出て来ないのです。ようやく出てきたザカリアは、話すことができなくなっていました。ザカリアは身振りで何かを訴えましたから、周りの者は彼が聖所で幻を見たのだらうと思いますが、問題は彼の状態です。突然、舌がもつれて口が利けなくなるのは、間違いなく病気の兆候です。聖所での務めを果たす間に発症したのでしょうか。それと相前後してエリサベトが身ごもったと知った周囲は、きっと手放しで喜ぶことはできなかったに違いありません。「神は、ザカリアの命と引き換えに、子をお与えになったのだ」と考えた者もあったかもしれません。その子がようやく誕生したとき、話すことのできないザカリアを差し置いて周囲の者たちがその子の名を「ザカリア」と父の名にしようと働きかけたのも、そういう事情があったからでしょう。

周囲の者たちが驚いたのは、そのような名付けをエリサベトが拒んで、「ヨハネとしなければいけない」と頑として譲らなかったことでした。そして、ザカリアもまた、言葉が出て来ないままに書き板に「名はヨハネ」と記したということでした。それは、彼らの家系にはふさわしくない名だったようです。周囲の者は、ザカリアがそのような名を望むとは考えなかったのです。ザカリアの性格（生真面目で、人と違うことなど決してしない律義な人だったかもしれません）を知っている周囲は、そのザカリアがエリサベトの言う「ヨハネ」の名を認めたことに、驚いたのです。一体、ザカリアの身に何が起こったのだろうか、と。そして、彼らは、そのことを心に留めたのです。その子に将来起こることを見るために。

彼らの中に、きっと「洗礼者」と呼ばれるようになったヨハネを見ることになった者があったでしょう。そして、その中には、ヨハネを通して主イエスを見ることになった者があったはずです。そして、その方の中に、神がこの世界においてくださったこと、しかも、ほんの片隅の「飼い葉桶」の中にまでおいでくださって、住まってくださっていること、御業を始めてくださっていることを見るようになった者たちも、ありました。

わたしたちは、その人たちと共に、「主の降誕」の物語を聞き、祝うのです。